

【講演記録】

東西交流の中の 日本文化



山口 博

聖徳大学教授・聖徳大学言語文化研究所長

於

平成十七(二〇〇五)年十二月六日(火) 午後一時～二時半
跡見学園女子大学 二二七一教室(視聴覚教室)

日本列島に伝来した西アジア文化の最古は、現在の段階では、凡そ二千年前の弥生時代中頃です。卑弥呼で知られている邪馬台国の時代、北九州に伊都国がありました。そこからファイアンス玉一個が出土したのです。ファイアンス玉？ 聞いたことないですね。これは紀元前四千五百年頃、エジプトやメソポタミアで、石英の粉を練って焼いて作られていた青い色の貴石です。

遙か大昔、西アジアでファイアンス玉を連ねたネックレスが作られ、長い時間をかけてシルクロードを通り、倭国に到達したのです。舶来のネックレスをつけて得意顔の伊都国女王の顔が目に見えるようですね。卑弥呼も着けていたのでしょうか。

ファイアンス玉は青色です。西アジアや中央アジアの人達は、青色を崇高な魅力ある色としています。それで、天然の青色の石、ラピスラズリを最高の貴石として尊重しました。ラピスは「石」、ラズリは「青」という意味です。ラピスラズリは今戦乱の中にあるアフガニスタンでしか取れません。ラピスラズリが尊ばれたことは、紀元前二十世紀、メソポタミアの女神像を飾る装飾品として多数使われていることでも分かります。

そのラピスラズリが、七世紀末には日本列島に伝わっていたのです。奈良県明日香村にある高松塚古墳の壁画で、人物の青色の衣服を描く顔料として使われていたのです。八世紀の正倉院にある革帯にも使われています。十世紀中頃に書かれた『宇津保物語』にて、造花の青色の実は「紺青」で作られたとあるのも、ラピス

ラズリです。藤原道長も外国商人から手に入れていました。

青色の貴石で幸せを願いました。遠くから幸せを運んでくれるのは鳥。西アジアの人達は、たくさんの房を付けるブドウの枝を鳥がくわえてきて種を落とし、芽生え、豊饒をもたらすと考えました。それでそれを模様にした「昨鳥文」を考え出したのです。

私が見た最も西の昨鳥文は、地中海に臨んだシリアのパルミラ遺跡の浮彫です。そして、タリバンに爆破されたアフガニスタンのバミヤン、中国文献に胡人と書かれているソグド人の国ウズベキスタン、そしてシルクロードの各地、長安の都と、昨鳥文は東へ東へ飛んで来ました。

鳥がくわえているものも、ブドウではなく宝石の付いたネックレス、組紐のリボンなどに変わりました。こういうものは身分の高い人でなければ身に着けられません。そこで政府の高官のシンボルになりました。唐朝は、三位以上の高官のみに昨鳥文の模様の衣服を許したのです。現存しているものはほとんどないのですが、その切れ端を私は蘇州の絲綢博物館で見ました。

その模様は日本にも渡ってきて、正倉院御物に数多く見られます。奈良時代の人もその模様を愛したのですが、歌にも作りませんでした。作者は分かりませんが、『万葉集』巻十にある次の歌がそれです。

春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも

鳥のように人は空を飛ばませんが、乗ることのできる馬が空を飛ばたら……創造力が、馬に翼をつけた天馬、ペガサスを空想し

ました。ギリシア神話から始まって、アラビアンナイト、ソグド人の衣服の模様、シルクロードの壁画と東進し、これも日本海を渡って来ました。法隆寺にある竜首水瓶、正倉院の紅色象牙作りの物差しなど、ペガサスは日本列島をも飛び回り、『宇津保物語』にもベルシアに漂着した主人公を乗せて西へ走りに走るペガサスが描かれています。

シリアの鳥がくわえていたのはブドウでした。ペルシアにはブドウの木の下に立つ女神を刻んだ銀製水差しが出土しています。ブドウも女神も、共に子孫を増やす繁栄・豊饒のシンボルです。豊かな樹木の下に立つ女性、この文様も樹下美人の図柄として西アジアから東アジアに、そして日本列島にまで広がりました。シルクロードのトルファン郊外のアスターナ出土の樹下美人図は、熱海のMOA美術館にありますし、正倉院蔵の「鳥毛立女屏風」は日本製の樹下美人像です。

同じころ、今の富山県、当時は越中といいましたが、越中守であった万葉の歌人大伴家持も、

春の苑紅匂ふ桃の花下照る道に出で立つ乙女

という、桃の木の下に立つ美少女の歌を作りました。これも日本で流行した西アジア伝来の文化であったのです。

日本古代の文化を考える人の多くは、西アジアまで目を向けることをしていません。国際化の時代、もっと広い視野に立って日本文化を見つめようではありませんか。